

～家族を育てる自宅出産～

皆様、お久しぶりです。さて、今回は「自宅で産む」という選択が「家庭づくり」にどう
いうメリットがあるかを、我が家のケースでご紹介したいと思います。

「出産は実家の方で」というのは、世の中ではあたりまえのようですが、私は「出産は実
家の方で」という図式は、現代の社会の中で決して良い選択だとは思っていません。

なぜなら「実家で産む」ということは、この閉ざされた核家族の社会の中で、あなたの一
番良き子育てパートナーになるはずの、夫や小さな兄弟達を、子育てのスタートラインか
ら外してしまう事になりかねないからです。

例えば、出産後1～3カ月を実家でゆっくりと過ごし、自宅に戻ってきたとしましょう。

あなたは突然、全てを自分でこなさなくてはならなくなり、当然キーキーになり、赤ちゃ
んは、抱いてくれる手も激減されギャーギャー泣き喚きます。それなのに、唯一の頼りの

夫はまるで関心を示さず、赤ちゃんが泣くたびに「ミルクじゃないのか」「オムツじゃない
のか」「うるさいな、なんとかしろ」と言うばかり・・・。小さな兄弟達は、大好きなママ

が一週間もいなくなった上に、突然自分以外の者とラブラブで帰ってきたので、悲しみて
胸が一杯。ママがどんなに「この赤ちゃんは、神様から、あなたへのプレゼントよ」なん

て言っても、決してそうは思わないでしょう。

かくして、何かが、おかしくなっていってしまうのです。静かに。でも、決定的に。

なぜ、夫は何もしないのでしょうか。なぜ小さな兄弟達は「早く、こんなチビいなくなれ
ばいいのに」と思い始めるのでしょうか。

それは、妊娠後期～出産～産後の、一番苦しい時を、共に乗り越えていないからではない
でしょうか。彼らには「共に戦う仲間だ」という気持ちが育っていないのです。社会全体

が協力し合っていた昔と違い、今の核家族ばかりの社会の中で、夫や小さな兄弟達の協力
なしに子育てするというのは、悲惨な状態と言わざるおえません。これでは、孤独で息の

詰まった母親達の顔つきが、怖いものになるのも当然です。

私は、出産は「家族」のものであるべきだと思います。

実家がどんなに素晴らしい所でも、生まれてくる赤ちゃんは、おじいちゃんおばあちゃん
のものではなく、夫と、あなたと、小さな兄弟達の宝物なのです。あなた達に会うために、

長い苦しい旅を乗り越えてやって来るのです。その苦しみを、痛みを、生まれ出る叫びを、
自分達の手で受け止めて、自分達の胸に抱くべきです。その後の、半分壊れかかった母親

を、必死でサポートすべきです。その大変さを経験することで、はじめて、自分達こそが、
手を差し伸べ、助け合う、その当事者だという自覚がうまれるのではないのでしょうか。

週末に妻の実家へ行き、ちょっと赤ちゃん甘いひと時を過ごして、ごちそうになって帰
ってくるだけの夫と、入社前に洗濯と妻の食事を作り、帰宅後に茶碗を洗い、洗濯物をた

たみ、赤ちゃんに風呂に入れ、夜は夜で、赤ちゃんの泣き声でろくに一ヶ月眠っていない

夫。同じになると思いますか。

一週間、おじいちゃんとおばあちゃんにおもちやづけ、お菓子づけにされ、待ちに待ったママが自分以外の誰かにチュッチュッしながら帰ってくるのを見た子と、お母さんの手を握り締めて「お母さんガンバレ」と半分泣きながら叫んだ子、同じになると思いますか。生命はこうして生まれ、生まれ、やってくるのだ。生死のかかるその迫力を見た者と、見ていない者。同じになると思いますか。

まあ、この例えは極端なのかもしれませんが、核家族、非交流の社会の中で、女性の子育てのパートナーになりうるのは、やはり自らの家族に他なりません。そして、そのことをはっきりと、本人達に自覚させる為に、自宅で生むという選択は、非常に有効な選択だと思うのです。

そして、大事なことを付け加えたいと思います。それは、「子に親は、育てられる」という事です。

私の場合、第一子が生まれた後は、ただただ、育児は苦痛なだけでした。単調でつまらなく、孤独で、子供ときたら、まるで24時間つけっぱなしのラジオのようにうざったい存在でした。可愛いなんて、思えなかった。前回お話したように、第一子出産時に喪失感を味わってしまった私は、全然子供を愛せなかった。そのことに自分自身が深く傷つき、そして子供をも傷つけた。食が細い子供に向かって「食べたくないんだったら、もう食べなくていいよ。腹すかして、病気になって、とっとと死んじゃえ！」と叫んだ日もあった。自分の中に、醜い鬼がいることを知り、恐ろしくなった。でも、子供は決してあきらめなかった。一生懸命「大好き」という気持ちを送り続けてくれた。そして、二人目が生まれて、辛さも、孤独も、自分を憎む気持ちも、全て半分以上に減っていることに気がついたのだ……。「あ、私、お母さんになってるんだ」と、その時気がついたのです。「子供が、私を育ててくれたんだ」と。

育児は、育自であるといいますが、正にその通りだと実感しました。子育てを通して、女は母親になっていくのです。そして世の男達や、小さな兄弟達も、その大変さを共有し一緒に乗り越えなければ、やはり父親、兄弟になれないのではないのでしょうか。自宅出産とは、母親を育て、父親を育て、兄弟達を育て、そして家族を育てる。大きな後押しとなってくれるものだと思います。

次回（最終回）は、私流の具体的な子育てのアイデアや、コツ、いろんな悩みへの対処法、とっても役立つオススメ図書などをお送りします。節約から、虐待回避、さらにはお父さんといつまでも仲良しでいられる方法に、自宅出産をよく知るための本まで、どうぞお楽しみに！（……でも、あくまでも私流なので……でも、他人のウラ情報は面白&役立ちのハズなんだぁッ）